熊本大学学術リポジトリ

硯友會和歌 ： 文苑

著者	奇熊，芝峰，山人，基紀，芝峯，桃江
雑誌名	龍南會雑誌
巻	６４
ページ	８３-８４
発行年	1898-03-30
その他の言語のタイトル	硯友会和歌 ： 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5078

付らん。

文苑

硯友會和歌

海邊早春（兼題）

春といへは霞のおくの浦浪も花とこそ見れわたつみの空　奇熊

浪華江のみきわの氷とけぬらし春をよせける浪の初花　芝峰

春のせて今かへるらひあま小舟帆かけに靄む淡路嶋山

蛋の子か盥くみわたる蘆間より春になり行浪華江の水

もしはたく煙の末や浪華江の春立つ今日の靄なるらむ

のとけさは袖にしられて唐衣きのふにも似ぬ浦の初風

評曰、いつれもよし

春來ぬといふはかりにや盥籠のうら淋しくも煙のみ立つ　山人

もしはやく煙の末もまた遠く霞もはてぬ浦の初春　基紀

新柳鶯

萌えいてゝ緑も深き青柳の糸にみたれぬ鶯の聲　芝峯

春風にけふ萌えいでし青柳のいとも床しき鶯の聲　桃江

もえいでし柳の糸に鶯の春のしらへの聲ののどけき　山人

春風春水一時來

春風に谷間の雪やとくるらむ里の小川の水まさりゆく　桃江

青柳のよりくる波の池の面の氷ひもとく春の初かせ　奇熊

春風にかけひの氷とけそめて昨日に代る水の音のする　芝峯

吹く風もとけし氷も立春のありか尋ねて今日を來ぬらん　基紀

春來れは風ものどかにとけそめし氷流るゝ谷のまし水

茶話會席上聯歌（雜報欄參照）

今日そ知るみ山の奥に咲きいでし花の盛りの春の景色を

まつはとそ樂しかりける今日あすと片山里の花のたよりを

まて去はしひとことと問はん里の人花咲く菴の今はいかにと

うらゝと日もはるかなる大空をわかもの顏に鳴く雲雀哉

朝かすみ棚引く山のいくへをか尾越し峰越し春は來ぬらん

評曰、下の句いと力あり

春の色の淺澤小野を朝ゆけは風の袂にかゝる淡雪

谷深く咲きいつる花の香をたにも人に知られて散そ悲しき

おはろ夜の月に匂へる宿の梅に閨さへかをる小簾の春風